

H A N A Z O N O

Global

Vol. 6

花園から世界へ！

「他人の幸せ＝自分の幸せ」花園高校を卒業し、アメリカで学んだグローバル禅僧

妙心寺春光院の副住職・川上全龍さんは、花園高校を卒業後、アメリカの大学に進学されました。現在は、外国人向けの坐禅指導や日本の企業を対象とした講演やセミナー等、幅広く活躍される一方で、花園中学高等学校グローバルZEN教育の特別顧問として、本校を支えてくださっています。

川上さんが、アメリカの大学で得たものとは？ 人間が幸せになる道とは？

花園のGTN・中村広記先生と、世界で活躍するグローバル人材との対談。第4回目は、川上全龍さんにお話を伺います。

花園プレス・グローバル



本では学べないことを学んだ

中村：そもそも川上さんが留学をしようと思われたきっかけは何だったのですか？

川上：花園高校時代に、実家の寺で留学生を受け入れたことがきっかけです。その後、自分でも留学をしてみたら、とても面白かったんです。メンタリティーが合っていたのでしょうね。それまでも、歴史や地理に興味があったり、世界を知りたいという気持ちはあったのですが、実際に外に出てみてやっと「自分にも何か面白いことができるかもしれない」「やりたい」と強く思うようになりました。

中村：最初はどの大学に入学されたのですか？

川上：高校を卒業してすぐの春、テキサス州ヒューストンにあるライス大学の語学学校に入りました。そこで一年半、英語の授業を受けながら、とにかく「人と話す」ようにしていました。ライス大学は、全米の大学ランキングでも常に上位に入るような大きな大学で、教授や学生からも刺激を受けましたし、テキサスという土地柄、南米や中東企業の石油関係者たちとも話をする機会があって、本からは決して学べない多くのことを学ぶことができました。大学の授業もいろいろと聴講して、社会学や心理学、マーケティング等の分野にも興味が広がりました。

中村：大変だったこと、印象的だった出来事がありますか？

川上：アメリカ、特に南部を旅行した際は、自分が「アジア人」であることを常に意識させられましたね。どこに行っても「白人ではない、黒人でもラテンでもない、アジア人」と認識されるんです。人種差別はいたるところで起こっていて、たとえば、このような見た目であるというだけで、レストランでぞんざいな扱いを受けたことがありました。勉強やスポーツでも、例えば白人が100やれば済むことを、僕たちは120やらなければ認めてもらえない。日本ではあまり考えられないことですが、このような経験を通して初めてマイノリティや弱者の気持ちが理解できるようになりましたし、生まれ持った才能よりも努力が大切なのだと改めて実感することができました。

中村：大学では何を専攻されていたのですか？

川上：その後、アリゾナ州立大学に編入して、宗教学と心理学を専攻しました。宗教学を選んだきっかけは、在米中に起こったアメリカ同時多発テロ事件でした。近隣の空港での厳戒態勢や反対運動等の非常事態を間近で見て、日本では感じることはできなかった「宗教」の影響力の大きさに衝撃を受けたんです。宗教学は、神学と違い、「神は存在しない」という前提から始まって、宗教というものを第三者の視点から考えていく学問です。仏教について、お寺について、その中には見えなかったことがいろいろと見えてきました。このあたりで、自分の生き立ちと自分のやりたいことが少しずつ繋がってきたんですね。



人間の本质は、利他の心

川上：実は、大学を卒業する頃になっても「寺を継ぎたい」とは考えていなかったのですが、大学のアドバイザーに「お坊さんになってアメリカに戻ってくれば、またチャンスが広がるのではないか」という助言をもらい、正式に資格を取ろうと思って修行道場に入ったんです。ところが、一年で修行を終えた後、すぐにロサンゼルスにある博物館の関係者の方に英語で坐禅を教えてくれないかという依頼があったんです。これを引き受けたところ、このご縁がきっかけとなって、海外からいろいろな人がお寺を訪れてくれるようになり、面白さを感じ始めました。副住職になってからは、主に海外の方に坐禅指導をしたり、外国人専用の宿坊を開く一方で、講演をしたり、マインドフルネス・アプリ（Campus for H の MYALO や JINS MEMES の ZEN）のプロジェクトメンバーになったり、さまざまな業種の方と協働して仕事をして、現在に至ります。

中村：留学で得たことは今でも活かされていますか？どんなことが活かされていますか？

川上：やはり、短期間ではなく長期間、それも成人する前の人格形成の時期から留学して、日本とアメリカの両方の価値観で物事を考えられるようになったことですね。アメリカの大学で宗教学を学んだお坊さんというのなかなかいませんし、これも自分の武器として、誰かの幸せのために役立てていけたらと思っています。

中村：誰かの幸せ、ですか。

川上：はい。以前は、「自分のしたいことをしたい」「自分の能力を証明したい」という気持ちが強くありましたが、「自分が、自分が」という意識を捨てたら、楽になりました。今は、「これで誰かが幸せになってくれるのなら幸せ」という思いが原動力になっていますね。結局のところ、人を幸せにするのは、家族や友人等の「他者との繋がり」ではないでしょうか。人間の本質とは何か、考えてみましょう。例えば、2011年度の小学一年生の65%は、将来、今日存在しない職業に就くだろうと言われていています。今、人がしている仕事の多くが、機械に取って変わられるからです。どんなに計算が早くても、素晴らしい記憶力を持っていても、それだけではコンピューターに負けてしまうんです。そうではなくて、人にしかないもの、人間の価値として最後まで残るものは、やはり、温かい「思いやり」や「利他の心」ではないかと思うんです。

一日一回、周りの誰かを幸せにする

中村：最後に、花園生へのメッセージをお願いします。

川上：家族や友人、近所の人をよく見て、「困っている人がいたら助けよう」という気持ちを持って生活してみてください。そういうことをしないで、いきなり「アフリカの孤児たちを助けよう」等と思える人はいないと思うんです。だから、まずは一日一回でいいから、身の周りの誰かを幸せにしてみる。「ありがとう」と言われる喜びを感じてみる。そうやって少しずつ「共感力」や「利他の心」を育てていってほしいですね。他人を思いやることは損だという考え方もありますが、実際に成功している人たちは皆、大きな利他の心を持っています。「他人の幸せ＝自分の幸せ」と考えるからこそ、本当に人の役に立つサービスを提供することができるし、それによって自分も幸せを感じられる。最初は半信半疑でも、やっているうちに変わってくるはずですから、まずは人を思いやってみて、そのときの自分の状態をよく観察してみましょう。自分を客観視できるようになればなるほど、自ずと他人の気持ちも強く感じるようになってきます。

中村：本日は、貴重なお話をありがとうございました！



H A N A Z O N O
P r e s s
Global

第六号はいかがでしたか？ インタビューの合間に、川上さんが制作に関わられたマインドフルネス・アプリやJINZの眼鏡を見せていただき、その仕組みの面白さに夢中になってしまいました。他人の欲しいものを想像する力、「これが利他の心かー！」と感動しました。私も、小さな親切を行うことから始めてみようと思います。(May K)